

徳法寺

助けを求める声

杉谷 伊吹

皆様こんにちは、如何お過ごしでしょうか。

世間では、深刻な問題が次から次へと重複しながら起こっています。そんな状況ですが、一日一日を乗り越えてまいりましょう。

現在、私は昨年末に産まれた我が子の育児に追われています。僧侶には一年中休みというものがありませんが、子育ても同じですね。私の何倍も頑張ってくれている妻に、日々感謝しています。

そんな育児に追われる中で、一日も絶えることなく聞くようになったのが赤ん坊の泣き声です。全力で叫ぶ時であれば、若干喚いてみただけの時もあります。赤ん坊は自分でやれることが極端に少ないので、泣き声を上げて頻繁に助けを求めるのだと解釈しています。恐らく人生で一番遠慮なく他者に助けを求める時期という

のは、赤ん坊の頃なのでしょう。そして私にも、かつてはそのようにして助けを求める事に明け暮れた、赤ん坊の時期があったはずなのです。ところが、いつの間にか他者に助けを求めることがとても下手になってしまいました。

『ぼくモグラキツネ馬』という私のお気に入り絵本の中に、次のような言葉のやり取りがあります。

「いままでにあなたがいったなかで、いちばんゆうかんなことばは？」

ぼくがたずねると、馬はこたえた。

「たすけて」

「いちばん強かったのはいつ？」

「弱さをみせることができたとき」

「たすけを求めることは、あきらめるのとはちがう」

馬はいった。

「あきらめないために、そうするんだ」

(チャーリー・マッケジー『ぼくモグラキツネ馬』飛鳥新社より引用)

(ちなみにですが、絵本なので文章だけ引くのは非常に作者に申し訳なく感じております。気になった人はお買い上げいただくか、お貸ししますのでお声掛けください。)

大人になってから他者に「たすけて」というのは、個人差はあれども勇気のいることですよ。相手に対して弱さを見せたくないだとか、信じる事が出来ないだとか、迷惑をかけたくないだとか、色々な理由に縛られてしまうものだと思います。本当は助けて欲しいと思いつつも、それを口に出すわけにはいかず、胸にしまつて耐えてしまいがちなのです。そうして多くの人が悩みや苦しみを抱えつつ生きていて、場に悲痛の沈黙が保たれてしまうという情景は、想像に難くないでしょう。しかし、ここぞという時は赤ん坊を見習って、色々な理由は一切無視して、他者に助けを求める自分を許しちゃっても良いのだと思います。内面に留めて耐えていても、それはやせ我慢でもんですから、いつかは無理が生じます。立派な大人のふりはやめて、時には赤ん坊に戻ることも、きっと大事なことです。

ぼくモグラキツネ馬



世界中で100万人の心をつかんだ本
うっかり読み聞かせすると、途中で出てくるのは
言葉ではなく涙です

チャーリー・マッケジー
川村元氣 訳

プレディみかこ

本当に大切なものは何ですか？

杉谷 淨

今年の報恩講では、五十嵐ジャンヌさんにフランスのラスコー壁画についてお話をいただきました。この壁画は、約四万〜一万年前にヨーロッパから北アフリカにかけて生活していたクロマニヨン人が描いたものです。この壁画があるヴェーゼル渓谷では、この他にも二万年から一万五千年前にクロマニヨン人によって書かれた多くの壁画が見つかっています。ラスコー壁画は一万七千年前に描かれているので、これ以外の壁画が描かれた時期とは「二〜三千年しか違わない」と五十嵐ジャンヌさんがおっしゃいました。そう言われてしまうと、お釈迦様が生まれたのもつい最近ということになってしまいます。



五十嵐ジャンヌさんの著作

考古学の世界では、二〜三千年はわずかな時間の差になってしまふのですが、これが宇宙史になれるとさらに時間の単位が大きくなります。宇宙が誕生したのは百三十八億年前、太陽が生まれたのが四十六億年前、地球に生物が生まれたのが三十五億年前です。恐竜は一億六千万年もの間、地球上で繁栄していたのですが、人類が誕生したのは、わずか二十万年前でしかありません。この宇宙では、私たちは新参者でしかないのです。この様に長い時間の単位で考えてみると、日頃こだわっていることが、とても些細なことではかと思えてきませんか。

インド哲学に「カルパ」という時間の単位があります。インドでは、この宇宙も生物のように誕生と消滅を繰り返していると考えていますが、宇宙が誕生し消滅するまでの時間が「カルパ」です。ヒンドゥー教では「カルパ」はブラフマー（仏教の梵天）にとつての一日で、人間の時間では四十三億二千万年になるといいます。中国仏教はこれを音写して「劫波」とし、さらに省略し「劫」と言います。親鸞聖人のご和讃にある「弥陀成仏のこのかたは いまに十劫をへたまえり」の「劫」です。また、落語『寿限無』にも「五劫のすり切れ」や『正信偈』の「五劫思惟」の「五劫」は「法蔵菩薩は五劫のあいだ思惟して阿弥陀如来になった」という経文に由来しています。仏教は「劫」に具体的な長さを示していませんが『大智度論』という論書には「一辺四千里（中国の換算比で約二千km）の岩を百年に一度布でなで、岩がすり減って完全になくなっても劫に満たない」と

という説（磐石劫）と「一辺四千里の城にケシ粒がぎつしり詰まっており、その中から百年に一粒ずつケシ粒を取り出していつて、城の中のケシ粒が完全になくなくても劫に満たない」という説（芥子劫）などが紹介されています。

これはとても長い時間ですが永遠ではありません。長さがあることで、日常の時間と比較することが出来るのです。すべての人が幸せになる方法を見つけるため阿弥陀如来は五劫もの時間を費やしたのに、私が数十年考えたところで答えが出るはずがない、となるのです。

生きている限り悩みが尽きることはありませんが、その悩みの多くは大切なものが失われることへの不安なのではないでしょうか。そのときに次のように考えてみてはいかがでしょうか。

僅か二十万年前に生れたばかりの人類の、さらに二千年にも満たない歴史しかない日本の中で、私たちは生きています。しかも仏教は「諸行無常」と説いています。つまり、人間社会を含めた今の環境は出来たばかりのもので、この後も絶えることなく変化し続けていくのです。このような世界の中で本当に大切なものは、消えてなくなつたとしても、その輝きを失わないものなのではないでしょうか。

日頃の忙しさに追われ、何が大切なのかを見失つてしまいがちな中で、考古学や天文学、そして仏教に触れることで、今一度自分の人生を見直してみたいかがでしょうか。

お盆について

杉谷 勇勝

正しくは盂蘭盆という。先祖の霊を慰める行事で、七月十三日から十六日（または十五日。所によっては八月の同日）まで行われます。印度のウランバーナという行事が始まりで、家では仏前にお供えをし、墓詣りをする行事ですが、今少し詳しく説明しますと、盂蘭盆には二つの説があります。

一つは、仏教からの説明で、お釈迦様の高弟の目連尊者が神通力（神通力とは私達の思慮では測ることが出来ない不思議なる無碍自在の通力）を得て後、父母を尋ねた時、亡母が餓鬼道に堕ちて逆立ちの苦を受けているのを見、仏に救済方法を問うた所、毎年七月十五日に十方の大徳衆僧を招いて供養すると、現世の父母は寿命を保ち、過去七世の父母は天中に生まれると教えられた。この説は『盂蘭盆経』というお経にその由来が書いてある所からそのように説明されています。そしてこの教義から盂蘭盆が行はれる様になった、との事です。

又、盂蘭盆とは梵語（印度の古代の言葉）のウランバーナの転語で、倒懸（逆立ち）の意という。日本では斉明天皇三年（六五七）七月十五日に、飛鳥寺西に須弥山の形を造りお詣りをしたのが始めて、中国では梁の武帝大同四年（五三八）同泰寺にてこの行事をしたのが初めという。そして、行事としては、所によってまちまちですが、七月十三日に



海軍兵学校時代の前任職

は迎火といつて家の内外に火を点じて亡くなった方達の霊を迎え、十四・十五日は家に留まるといい、位牌の前に果物を具え、お経を読み十六日には霊が此の世を去る時として送り火門外又は河岸につけて之を送り、供物や燈籠を河に流す所もあります。また、夜は盆踊りといつて、老若男女が集合して踊るが、これは亡き霊がお盆に歓喜するかたちを模したという説もあります。

又、他の一説は、民間の盆行事は仏教の影響を多分に受けているが、正月行事と共通点が非常に多く、これは正月とともに年二回に行われる、仏教渡来前の霊祭の一つであつて、「うら盆」というのは、七月十五日を中心として前期を宵盆、迎え盆とこの行事をしたのが初めという。そして、行事として、所によってまちまちですが、七月十三日に

味する古語「うら」の意であるという。

以上のように、いろんな説がありますが、現代の

私達は、その起源はともあれ、お詣りするという事は、亡くなられた方々に対し、その生前や御恩を想い出し、御礼を申し上げ、供養する行事だと思います。

供養とは「供」はそなえると読みますが「まつる」「うやうやしい」という意味があり、形としては「物」を供えますが、そのことを通じて「仏」のころ、人のまことに交いあう深い思いがあります。「養」はやしなうと読みますが、「かざる」「心をたのしむ」という意味もあります。ですから、ものをささげるのは、仏の心に聞き入って、その威徳をたたえまつるのです。眼に見えない大きな「おかげ」を仰ぐ事なのです。そして、供養する自分が、かえって、限らない供養のなかに含まれているのに目覚めることでしょう。ここにお盆にお墓まいりをして、供養することの意味があると思います。

この原稿は、今年十七回忌を迎えた前任職の遺品の中にあつたものです。送り火・迎え火を行わない金沢の盆の習慣が書かれていないことから、大谷大学在学中のものではないかと思えます。柳田国男などの民俗学が盛んであつた当時の時代背景をうかがわせる内容です。ほぼ原文のまま掲載しましたので、言葉使いが統一されていませんが、若者らしい内容と合わせて楽しんでいただければと思います。

徳法寺からのご案内

徳法寺 仏教入門講座

毎月二十一日午後七時半より

講師 徳法寺住職 杉谷淨

心の相談室

毎月第四土曜日の午後三時から午後五時まで

横安江町商店街にある「いちよう館」二階にて真宗大谷派の僧侶による「心の相談室」を開いております。個室で相談をお受けします。仏事はもちろん、家庭や職場、学校など、どのようなお話もお聞きします。相談は無料です。予約も必要ありません。

相談内容は一切外に漏れることはありませんので、お気軽にお訪ねください。

サンガ茶話会

毎月第一木曜日の午後三時から午後五時まで

横安江町にある東別院敷地内「真宗会館」一階囲炉裏の間にて「心の相談室」スタッフによる「サンガ茶話会」を開いております。座談形式となっております。僧侶やその場に集まった方々とお話しませんか。いろいろな方に聞いてほしい話、聞いてみたい話がある方はお気軽に参加してください。他の参加者の話を聞いていただけでも構いません。参加は無料です。予約も必要ありません。出入りも自由ですので、途中参加、途中退室でも大丈夫です。お茶とお菓子をを用意してお待ちしておりますので、お気軽にご参加ください。

徳法寺秋彼岸展

高尾升道水墨画展

九月十七日(土)から二十六日(月)まで

徳法寺では二回目となる高尾升道氏の水墨画展を行います。多くの後継者を育成なさっていらつしやる最高水準の水墨画をお楽しみください。

秋彼岸法要及び永代経法要

九月二十三日(金・祝)午後二時から午後四時まで
読経の後、当寺住職の法話となります。

徳法寺秋彼岸 高尾升道水墨画展
9月17日(土)~26日(月)



秋彼岸中日及び永代経法要
9月23日(金・祝)午後2時より
勤行『仏説観無量寿経』
法話 当寺住職 杉谷淨

徳法寺 〒921-8051 金沢市野町2-52-4 TEL. 076-241-5219

表題揮毫 中田 八千代

徳法寺 石川県金沢市野町二丁目三二番四号

TEL 076(241)5219

ホームページ <http://tokuhou-ji.com>

参加費はお賽銭のみです。どなたでもお気軽にご参加ください。